

# サンシャイン 2057

2007(平成19)年3月19日鑑賞(東宝試写室)



監督=ダニー・ボイル/出演=キリアン・マーフィ/楊紫瓊/クリス・エヴァンス/真田広之/ローズ・バーン/クリフ・カーティス/ベネディクト・ウォン (20世紀フォックス映画配給/2007年アメリカ映画/108分)

……タイトルとは裏腹に、近未来の2057年に太陽が消滅！ すると地球は……？ それを阻止するためには、太陽に近づき、そのど真ん中に核弾頭をぶち込むこと！ そんな理論が成立しても、実際にやるのは命懸け……？ 8人の隊員を乗せたイカロス2号は、試行錯誤をくり返しながら困難な任務を執行していくが……？ クソ難しい理論は横に置き、壮大なSFモノにふさわしい美しい映像に大注目！ そして、真田広之の船長以下、エリート乗組員たちの苦悩と決断の人間ドラマをしっかりと……。

## 太陽が消滅！

2057年といえば、今から50年後。私はもちろんこの世におらず、私の息子や娘がおじいさん、おばあさんになっているという近未来……。そんな私にとっての近未来SFモノの最高傑作は『猿の惑星』シリーズだが、これは物語性重視。これに対し、『ディープ・インパクト』(98年)などは、科学技術論重視。

2057年には太陽が消滅！ そうなれば既に氷河に覆われている地球も消滅！ それを防ぐためには、可能な限り太陽に近づいて、太陽に核爆弾をおち込み、核爆発により太陽を再起動させるしかない……。そんな突拍子もない(?)発想から生まれたのがこの映画。しかし、そんなことホントにできるの……？

## 核開発の議論への波及効果は……？

北朝鮮の核開発問題をめぐる6カ国協議では、現在アメリカの大幅な「譲歩」

が進んでいる感がある。3月19日には、金融制裁によって凍結されていたマカオの銀行バンコ・デルタ・アジアの北朝鮮関連口座の資金約2500万ドル（約29億円）を全額返還することで北朝鮮と合意したことが報じられた。「次は北朝鮮が動く番」、アメリカのクリストファー・ヒル国務次官補（東アジア・太平洋担当）はそのように発言しているが、さて……？

アメリカがイランの核開発については敏感だが、北朝鮮のそれについて少し鈍感なのは、ある意味当然だが、日本にとってはそりゃヤバイこと……。

それはともかく、この映画を観ていると、今後50年間アメリカの核開発が順調に進展していることが大前提。また、同時に大国間の戦争もなかったことが大前提。しかし、ホントは50年後に太陽が消滅して地球が減じる危険より、核開発競争による大国間（多分アメリカと某国……？）の戦争による人類絶滅の危険の方が確率が高いのでは……？ したがって、この映画を観て、核爆発の成功にうつつを抜かしているととんでもないことになる危険性も……。つまり、この映画が核開発の議論へ与える波及効果も慎重に考えなければ……。

## やはり理系出身者が優位に……

中国は「人治から法治」に向かっているが、日本でも「2割司法」と呼ばれた現状の反省のうえに、法による支配拡大の必要性が議論され、さまざまな司法改革が進められてきた。法科大学院の設立しかり、弁護士増員しかり、そして裁判員制度の導入決定しかり。しかし、その見通しは……？

日本では中央官僚の大多数が東大法学部卒だから、文系出身者が国家のエリートとして働くことが多いが、中国共産党の指導部は胡錦濤や温家宝をはじめ、その大半が理系出身者。それと同じように（？）、カネダ（真田広之）を船長とするイカロス2号の乗組員8名はみんな理系の学者ばかりで、文系は1人もいない。やはり、国家存亡の戦いや地球滅亡の戦いになると文系出身者は不要で、理系出身者が重宝され、優位に立つのは当然……？

## ミッションの狙いはわかるが……

映画の冒頭、地球から最後の望みを託されたイカロス2号の狙いが語られる。

それによって、その科学的根拠の概要について少しは理解することができる。しかし、イカロス2号が運ぶ核爆弾ペイロードの威力の程度になるとサッパリ……？ さらに、イカロス2号の姿は再三スクリーン上（宇宙上）で見ることができ、私にはその大きさや核爆弾の大きさなどを含めて、全体の姿や構造がサッパリわからない。

したがって、太陽に近づくにつれて次々と発生するトラブルに対して、必死に対処しているクルーたちの動きがなかなか理解できないため、クルーたちとその必死さを共有できないのが少し残念……。

## イカロス1号への接触の是非は……？

水星の軌道に入ったところで、イカロス2号は7年前に消息を絶ったイカロス1号の遭難信号を受信した。そこで始まったのが、クルーたちによるイカロス1号に接触するべきか否かという議論。

この場合、原則論は与えられた任務の遂行が第1だから、イカロス1号に生存者がいるかもしれないとしても脇道にそれるべきではないという主張で、それはほぼ全員が一致するもの。しかし、同じ「接触」論ながら、全く視点の違う主張は、「イカロス1号がもつ核爆弾を利用できれば、太陽に核爆弾を撃ち込み成功する確率が倍になる」というもの。

与えられた教科書があるわけではなく、全く未知の状況下で、瞬時に最も確かな判断を下さなければならない8人のクルーたちは大変だが、船長のカネダはみんなの意見を十分聞いたうえで、イカロス1号への接触を決断した。しかしそれが、さまざまな問題を発生させることに……。

私に言わせれば、今さら成功の確率が2倍になるからといって、未知の危険を冒すことになるこの決断は絶対ナンセンス。もっとも、そうすると、映画のストーリー構成を全く別に考えなければならないことになってしまうが……。

## さっぱりわからん……？

イカロス1号への接触を決断したイカロス2号が進路を変更したのは当然だが、そのために警報が鳴ったり、イカロス1号の中に入っていった3人のクルーにさ

まざまなトラブルが発生したり……。ところが、文系出身者の私には、何が原因でそうなったのかサッパリわからない。またそのため、どんな対処法をとっているのかもわからないし、何せ宇宙船の中が広いため、誰が、どこを、何のために走り回っているのかがサッパリわからない。

これが潜水艦モノであれば、重量のバランスをとるために乗組員が移動する、爆雷が近くで爆発したから電灯が消えた、〇〇m以上潜航したら艦自体が水圧に耐えきれずペシャンコになってしまう、などの理屈がわかっているだけに、乗組員たちが必死の表情で生きるための闘いを続けていることがわかるのだが、この宇宙船の中ではそういうことがサッパリわからない……。もう少し文系出身者でもわかるような丁寧な説明がほしいと思ったのは、私だけ……？

## 宇宙服では演技力が減殺……？

「宇宙モノ」には宇宙服が不可欠だが、困るのは宇宙服の演技では、いくら熱演していてもそれが私たち観客に容易に伝わってこないこと。この映画では、イカロス2号の中だけでなく外に出て船体を修理したり、イカロス1号の中に入り込んで調査したりと、宇宙服を着ることを前提としたストーリーや演技にかなりのウエイトがあるが、カネダ＝真田広之以外はそれでなくても顔と名前が一致しにくいのに、宇宙服を着ていると余計にそう……。その意味では、こういう宇宙モノをつくる場合、監督は宇宙服では演技力がかなり減殺されることを十分計算に入れなければ……。

## 美しい映像が魅力だが……

この映画の売りは、最先端のVFXテクノロジーを導入した美しい映像。「サンシャイン」といえば美しい響きだが、太陽に近づきその熱をまともに浴びれば網膜が焼けてしまうのは当然。そこでこの映画では、さまざまな映像処理を施しながら、太陽の熱く明るい光をスクリーン上に映し出しており、その美しさは大いに魅力的。しかし、その美しさだけで作品を成り立たせることはできず、大切なのはやはり、作戦決行までに発生するさまざまなトラブルの中に見る人間ドラマ。しかして、極限状態の中で発生するそれらの人間ドラマは……？

## ミッションの成否は……？

『ディープ・インパクト』にしてもこの『サンシャイン 2057』にしても、発想は面白いが、映画の結末は成功か失敗のどちらかしかないし、失敗では物語にならないのが普通。したがって、この手の映画では、トラブルを乗り越え乗り越え、また多くの犠牲を払いつつ任務をやり遂げ、ハッピーエンドということになりがち……？

その場合扱いが分かれるのは、ミッションを遂行した「選ばれし者たち」の生死。すなわち、立派に任務を達成して帰還し、祝福を浴びるケースと、尊い犠牲者となって永遠に人々の記憶に残るケースの2つに分かれるが、さてこの映画では……？

2007(平成19)年 3月20日記

ミニコラム

### 国際派、真田広之に大拍手！

渡辺謙は今や堂々としたハリウッド俳優だが、おっとどっこい、『ラスト・サムライ』で共演した真田広之は、ハリウッドの他イギリスの舞台やアジア映画でも活躍する国際派。子役として5歳の時から活動してきた彼には、『麻雀放浪記』や『たそがれ清兵衛』などの代表作も。NASAで働く宇宙飛行士には向井千秋や若田光一がいたのだから、イカロス2号プロジェクトに誰も日本人がいないのは不当。また『上海の伯爵夫人』では日本人軍人が必要だし、『PROMISE』では、中

国・香港・台湾を代表する俳優に対抗できる日本人俳優が必要。そんな要請にいつでも応えられるのが真田広之だ。

彼の外国映画への出演は、今後も『ラッシュアワー3』『スピード・レーサー』等と続くからすごい。狭い日本の中で、日本語だけの映画にとらわれず、真田広之に続く第2・第3の国際派俳優の登場が望まれるが、小粒となり夢や意欲を持たなくなった今の日本人にはとても無理……？

2007(平成19)年 7月13日